

ヤン・フスとチェハ語表記方法の改革

鈴木 秀 勇

I

スラヴ言語学の始祖でありチェハ国民文芸興隆の指導的形姿であったヨゼフ・ドブロフスキーは、『チェハ語史』(1791)の制作にあたって、“第四期——チェハ語支配の時期”の叙述を、「チェハの宗教改革者フスと共に、チェハ国民とその文化との、従ってまたその言語との歴史の上に、一つの・新しい時代が始まる¹⁾」という一文で開始した。その理由は、著者が、ヤン・フスにおける〈母国チェハ語の使用〉と〈民衆教育〉との結合に着眼したからに外ならない。²⁾同じドブロフスキーの『チェハの言語と文学との歴史』(1792)³⁾や『チェハの言語と古文学との歴史』(1818)⁴⁾によって見ても、彼は、ヤン・フスの手になる・聖書のチェハ語訳(新約聖書からは『マタイ伝福音書』第二章、第九章。旧約聖書からは『伝道の書』第十一章、『雅歌』、『詩編』第一三四句以下、外典『ソロモンの知恵』、『シラク書』、——いずれも 1406 年成立⁵⁾)、ならびに『聖物売買について』、福音書諸編の『講解』等から成る・真正二十三編⁶⁾のチェハ語著述⁷⁾にたいして、やはりその視点からする評価を捧げているのである。

ところでヤン・フスには、ほかに、チェハの言語⁸⁾に関係する作品として、チェハ語アルファベットを有意味の一文に構成した通称『アベツェダ』⁹⁾と『チェハ語正字法』との二つがあるのであるが、ドブロフスキーは、前記『歴史』のいずれにおいても、『アベツェダ』には論及しながら、しかし『チェハ語正字法』についてはふれるところが全くなかった。その理由はほかでもなく、ドブロフスキーは、1547 年に北モラヴィアのプロスチェヨフ(Prostějov)でヤン・フスの名を冠して刊行された『アベツェダ』を披見しえたにとどまったからである。『チェハ語正字法』の稿本の一つは、チェハ近代歴史記述の祖でありヤン・フス研究の先駆でもあったフランティシェク・バラツ

キーの手で、1827 年 8 月 13 日、南チェハ・トゥシェボニユ (Třeboň) のシュヴァルツェンベルスキー文書保管所で、初めて発見されたのであって、ドブロフスキーとしては、これを聞知しえたにせよ、もはやチェハ言語史の中で取扱う機縁を失したのであった。もしかりに彼がいずれかの『歴史』の中で『チェハ語正字法』を論じたとするならば、この傑出した言語史家がヤン・フスに寄せた評価は、さらに大きなものとなったことは疑いない。

しかし、ヤン・フスにおける〈母国語使用〉と〈民衆教育〉との結合にたいするドブロフスキーの着眼は、はるかにくだってミラン・マホヴェツの『フスの教説とチェハ国民の伝統における意義』(1953年)の中にも生き続けている、と言うことができる。すなわちマホヴェツは、“ヤン・フスの教説の基礎としての民衆性・民主主義”を論ずるさいに、まことに簡略ではあるが、フスが心した・民衆に語りかける言葉の〈わかりやすさ (srozumitelnost)〉の問題から、ヤン・フスにおける〈国語への配慮〉のそれに説き進み、ここへ『チェハ語正字法』制作の意義を結びつけてくるのである。¹⁰⁾

時代は前後するけれども、ヴァーツラフ・フライシュハンスは、その著『ヤン・フス師』(1915年)の第四章“国民の指導者”の中で、『チェハ語正字法』よりはむしろ『アベツェダ』を立入って扱うのであるが、彼はそのさい、ヤン・フスの原則は二つ、すなわち「飾らず、わかりやすく書け (piš jednoduše a srozumitelně)」と「¹¹⁾耳で聞くとおりに書け (pis, jako slyšíš)」との二つであった、と指摘している。第一の原則はやはり、ドブロフスキーからマホヴェツに流れるのと同じ評価を示している、と言ってよい。事実、フライシュハンスは、自ら編集する『ヤン・フス師 選集』第五卷 ([1908年]) に『チェハ語正字法』を収める時、それへの“序文”の中で、ヤン・フスにおける〈チェハ語整序の努力〉と彼の〈民衆性〉との結合を告げているのである。¹²⁾第二の原則は、同じ『チェハ語正字法』への“序文”に、ヤン・フスにおける「一音・一文字」の方法として語られるものであって、フライシュハンスがヤン・フスのチェハ語整序の言語学的意義をとらえる場合の・一つの特徴を示すものである。

これにたいして、ヴァーツラフ・ノヴォトニーの『ヤン・フス師 生涯と著作』(第一巻、1919 年)は、『チェハ語正字法』を目して、ヤン・フスの中に生きている〈天性の言語学者、文法学者〉の創造事業と見、彼の〈理論的能力〉の高さの証左である、とするのである。¹³⁾ノヴォトニーが、「これによって見れば、ヤン・フス師は、本来の意味でのチェハ文章語を創造し、きわめて正当で・まことにゆるぎのない基礎

の上に立ち、形式・内実いずれの面でも卓抜な方法に従って、チェハ語正字法を確立した、と言える。そしてこのことは、今日、専門言語学者のひとしく公然と認めるところである」と述べる時、そこには、ヤン・フスを駆ってチェハ語の整序に向かわしめた・彼の「言語理論上の関心」にたいする崇敬の念が、強く働いているのである。¹⁴⁾¹⁵⁾

このように、今までのヤン・フス研究の上では、『アベツェダ』と『チェハ語正字法』との意義をめぐって、ヤン・フスにおける〈母国語使用〉と〈民衆教育〉との結合を重視する評価と、それらを彼の〈高度の理論的能力〉の表白としてとらえる解釈とが、存在した。われわれは、もちろん、このいずれをも肯定するのであるけれども、しかしすでに他の箇所指摘したように、この二つの理解の上にさらに加えて、あの二作品は、母国語文化の発展という・その最もふさわしい領域におけるナショナルイズムのヤン・フスにおける発現である、と考えるのである。

ところで、その点はしばらくおき、肝腎のこれら二作品自身について言えば、これまでドブロフスキーとフライシュハンスとがそれぞれ『アベツェダ』を紹介し、¹⁷⁾『チェハ語正字法』については、1857年にA. V. シュムペラが前記稿本にチェハ語訳を付して刊行し、¹⁸⁾のちにフライシュハンスが、シュムペラ訳に基づいてこれを『選集』中に収録した¹⁹⁾ものがあるにすぎない。とりわけ、『チェハ語正字法』についての分析は、これまでのヤン・フス研究史に欠如していた、と言って差支えない。

そしてこの欠如は、なによりもまず、ドブロフスキーといい、フライシュハンスといい、あるいは、ノヴォトニー、マホヴェツのいずれにしても、ヤン・フスに『アベツェダ』の制作を迫り、『チェハ語正字法』の工夫を迫った・十五世紀初頭の・チェハ語表記の混乱の現実をとらえず、従ってこの現実の復原との対比においてヤン・フスの改革事業を意味づける方法をとらなかったところに原因を持つ、と評するほかあるまい。

そこで本稿は、まずヤン・フスの著述の・若干の稿本に基づいて、この時期のチェハ語表記の乱雑な状況を復原し、ヤン・フスが『アベツェダ』ならびに『チェハ語正字法』を制作するに至った必然性を推測するための・一つの手掛りを提示する(第Ⅱ節—1)。ついで、ドブロフスキーやフライシュハンスにならって、『アベツェダ』を紹介し(第Ⅱ節—2)、最後に、『チェハ語正字法』の紹介と分析とを通じて、“言語学者”としてのヤン・フスの姿をうかがうと共に、彼が正字法に託した“教授学”的意図について承知することにしたい(第Ⅲ節)。

注

- 1) Dobrovský, Josef: *Geschichte der böhmischen Sprache*. [Olomouc], 1791. »Dějiny a české řeči a literatury. Spisy a projevy Josefa Dobrovského. Svazek VII. Vydal Benjamin Jedlička. Praha, 1936.« str. 36.
 なお、全く同じ記述が同著者の次ぎの著作にも現われている。Dobrovský: *Geschichte der böhmischen Sprache und Litteratur*. Praha, 1792. op. cit. str. 126.
- 2) Dobrovský: op. cit. str. 36—37.
- 3) 前出注 1) 中の 1792 年の著作。
- 4) Dobrovský: *Geschichte der böhmischen Sprache und ältern Literatur*. Praha, 1818.
- 5) Bartoš, F. M.: *Literární činnost M. J. Husi*. Praha, 1948, str. 101—102.
- 6) Bartoš: op. cit. str. 100—117.
- 7) Dobrovský: op. cit. str. 126—127, 303—305, 325—328.
- 8) [‘Abeceda’. *Inc.* A dude celé čeledi dáno…*Exc.* konec i počátek všeho dobrého požehnaný na věky. この成立はおそらく 1406 年。Bartoš: op. cit. str. 100—101.
- 9) [“Orthographia bohémica.”] *Inc.* Quia latinum abecedarium…*Exc.* iuxta industriam propriam breviabis. この成立については、従来、1406 年説と 1412 年説とがあったが、バルトシュは前説をとっている。Bartoš: op. cit. str. 72—74.
- 10) Machovec, Milan: *Husovo učení a význam v tradici českého národa*. Praha, 1953, str. 159.
- 11) Flajšhans, Václav: *Mistr Jan Hus*. Praha, 1915, str. 272—276.
- 12) *Mistra Jana Husi sebrané spisy*. Svazek V. Praha, [1908]. str. 105—106.
- 13) Novotný, Václav: *M. Jan Hus. Život a učení*. I—1, Praha, 1919. str. 183.
- 14) Novotný: op. cit. str. 184.
- 15) Novotný: op. cit. str. 183.
- 16) 『ヤン・フスおよびヤン・アモス・コメンスキー研究の問題点——チェコスロヴァキアにおける研究状況をめぐって』(二), 第六節。〔一橋大学・社会学部年報『社会学研究』第 8 号 (1966 年) 所収〕。
- 17) Dobrovský: *Geschichte*. (1818). op. cit. 304; Flajšhans: op. cit. 273.
- 18) M. J. Husi *Ortografie česká*, Vydal a přeložil A. V. Šembera. »Slavische Bibliothek. II. SS. 173 ff. «. 1857.
- 19) *Mistra Jana Husi sebrané spisy*. Svazek V. str. 106—113.

II—1

A. 本節に用いた稿本類について、簡略にするせば、

I. 1410 年から 1411 年にかけてヤン・フスがベツレヘム礼拝堂で行なった『説教』の稿本のうち三種類。¹⁾

- a) 記号 MS=ブラハ・国民博物館・所蔵(稿本番号・XVI・F・4)にかかる不完全稿本。成立は十五世紀第一・四半期。
- b) 記号 KS=ブラハ・国立ならびにカレル大学図書館・稿本部・所蔵(稿本番号・III・B・20)にかかる完全稿本。成立はおそらく十五世紀第二・四半期。
- c) 記号 E=ブラハ本山教会図書館・所蔵(稿本番号・E・XXXVII)にかかる稿本。成立は十五世紀前半。
- II. 1404 年 11 月末から 1405 年 10 月 末にかけて“時”をテーマにヤン・フスがベツレヘム礼拝堂で行なった『説教』の稿本のうち九種類。
- a) 記号 MT=ブラハ・国民博物館・所蔵(稿本番号・XIII・F・20)にかかる稿本。成立は十五世紀前半。
- b) 記号 AT=ブラハ・国立ならびにカレル大学図書館・稿本部・所蔵(稿本番号・XX・B・1)にかかる稿本。成立は十五世紀初頭。
- c) 記号 CT=ブラハ本山教会図書館・所蔵(稿本番号・F・XXX)にかかる稿本。成立は十五世紀。
- d) 記号 NT=ブラハ・国立ならびにカレル大学図書館・稿本部・所蔵(稿本番号・XV・4・15)にかかる稿本。成立は十五世紀中葉。
- e) 記号 OT=オロモウツ本山教会図書館・所蔵(稿本番号・C・O・123)にかかる稿本。成立は十五世紀前半。
- f) 記号 PT=ブラハ・国立ならびにカレル大学図書館・稿本部・所蔵(稿本番号・IV・B・2)にかかる稿本。成立は十五世紀前半。
- g) 記号 RT=ミュンヘン・市立図書館・所蔵(稿本番号・Clm・3581)にかかる稿本。成立は十五世紀中葉。
- h) 記号 ST=ブラハ・国立ならびにカレル大学図書館・稿本部・所蔵(稿本番号・III・A・6)にかかる稿本。成立は十五世紀中葉。
- i) 記号 UT=ブラハ・国立ならびにカレル大学³⁾図書館・稿本部・所蔵(稿本番号・III・F・16)にかかる稿本。成立は十五世紀。

B. sč (=staročeština, “古チェハ語”) は、その語が古チェハ語特有の語形・語意を持つことを示す。

nč (=novočeština, “現代チェハ語”) は、その語の・現代チェハ語における語形・語意を示す。

[] 内は、諸稿本に表記された sč を、nč の字母を用いて書き換えた語形であり、＝符号のあとのイタリックは、そのチェハ語のラテン語意を示す。

I. 母音

1. sč の長母音 a (nč:á) は、長母音記号を伴わず、短母音 a と同形で表記された。

dawagy [dávají=*dant*] MS・302^v, KS・33^vb.

dyelam [dělám=*facio*] MS・302^v, KS・33^vb.

hodowanie [hodování=*comessacio, convivum*] MT²・150^r.

krawy [krávy=*vacce*] MS・302^v, KS・33^vb.

narodu [národu=*nacione*] CT³・134^v.

nazywa [nazývá=*nominat*] MT³・166^v.

pzrevracenye [převrácení=*perversitas, corruptio*] PT²・112^{va}.

wladnuty [vládnúti, sč=*possidere*, nč: vládnouti=*regnare*] MS・291^r, KS・25^rb;

MS・302^v, KS・33^vb: MS・317^r, KS・47^{ra}.

yat [ját'=ego] MS・302^v, KS・33^vb.

zakon [zákon=*lex*] MT²・178^v, MT²・184^v.

(長母音 á を示すために、そのあとにくる子音を二重化したと思われる例が一つある。mrazz [mráz=*frigus*] MS・308^r, KS・39^{rb}.)

2. 短母音 e が, ey, ie, ye で表記された例がある。

rosseywacz [sč: rozevác=*diffians*] ST・157^{ra}.

giesscze [ještě=*adhuc*] MT²・101^r.

trzicziet [sč: třicetý, nč: třicátý=*tricesimus*] MT・179^r, RT・243^r.

zgiewny (zjevný=*apertus*) MT・185^r.

dossyel [došel=*veni*] MS・289^r, KS・24^vb.

vssyedneho [sč: všedního=*usitati, -i, -ae*] E・95^v.

3. 長母音 e (nč: é) は、長母音記号を伴わず、短母音 e と同形で表記されるのが通例であった。

czisteho [čistého=*pur*] E・95^v.

lekaržowich [lékařových=*medicarum*] MT²・103.

letech [létech=*annis*] MT²・178^v.

przyrozeneho [přirozeného=*naturalis*] KS・33^vb.

skuteczneho [skutečného=*realis, veri, certi*] E・95^v.

swarove [svarové=*contenciones*] MT²・185^r.

tuczne [tučné=*pingue*] MS・302^v, KS・33^vb.

zemskemu [zemskému=*terrestero, rustico*] CT・134^v.

(二重短母音 ee で長母音 é を表示した例が一つ見られる。hodnee [hodné=

bonum] AT・107^r, CT・17^r, UT・123^v.)

4. nč における二重母音 ě [ie] に相当する音については, sč は雑多な表示方法を用いた。

a) ie b) ye c) ge d) e e) ěe

a) miesta [města=*civitates*] MT²・44^v.

(myesta [místa=*loci*] MS・319^r, KS・48^{va}.)

sstiedrost [štědrost=*liberalitas*] NT³・128^r.

tiela [těla=*corpora*] KS・25^{rb}, MS・293^r.

trpiel [trpěl=*trbavi*] MT²・186^v.

b) hanyenie [hanění=*reprehensio*] CT・24^r.

hnyew [hněv=*ira*] CT³・134^v.

mnyet [mnět'=*mihi*] MS・302^v, KS・33^{vb}.

syie [sč: sě; nč: se.=*se, sibi*] MS・302^v, KS・33^{vb}.

c) swgedomye [svědomí=*consciencia*] MS・311^v, KS・42^{rb}.

d) pohanenij [pohánění, sč=*contumelia*] MT³・133^r.

kuoneny [k vonění=*pro odoracione*] MS・289^r, KS・24^{ra}.

penez [peněz. pl. 2.<peníz,=*nummum*] MT²・123^r.

ginomyslne [jinomyslně=*alia voluntate*] AT・438^v.

se [sč: sě; nč: se.=*se, sibi*] KS・26^{ra}, MS・293^v.

tayne [tajně=*occulte*] CT・44^r, UT・12^r.

e) mravnie [mravně=*veraciter*] AT・33^v.

(AT⁴・77^v では, mravnye.)

また, wypowiedyeny [vypovědění=*proscriptio*] CT⁴・112^r のように, 同一語のうちで, e と ye とを用いて, それぞれ nč の ě に相当する音を表記している例も見られる)。

5. 短母音 i の表記方法には,

a) y b) ij があった。

a) gym [jim=*his*] MS・302^v, KS・33^vb.

nadiegy [naději=*fiduciā, spe*] MT²・101^r.

nykdy [nikdy=*numquam*] MS・302^v, KS・33^vb.

tolyk [tolik=*tantus*] MS・302^v, KS・33^vb.

wsrdczy [v srdci=*in corde*] MS・301^v, KS・32^vb.

b) kterymij [kterymi=*quibus, quis*] MS・306^v, KS・39^{ra}.

6. 長母音 i (nč: í) の表記には、雑多な方法が用いられた。

a) i b) ie c) ij d) y e) ye

a) biti [bíti=*pulsare*] MT²・123^r.

dawagicze [dávajíce=*dans*] MS・307^v, KS・39^vb.

piti [píti=*bibere*] MS・322^r, KS・52^{ra}.

b) die [dí=*dicūt*] MT²・101^r, MT・103^r.

hrziesny [hřišný=*impius, peccatus, peccator*] MT・103^r.

zbozie [šč. zboží=*dominium, pecuna*] MS・302^v, KS・33^vb.

c) pohanenij [pohanění, sč=*contumelia*] MT³・133^r.

posluhagij [posluhají=*audiunt*] MS・302^v, KS・35^{va}.

d) dawagy [dávají=*dant*] MS・302^v, KS・33^vb.

magy [mají=*habent*] MS・291^r, KS・25^{rb}.

rytiezugycy [rytířující, sč=*pugnans*] PT・125^{va}.

spolecnyk [společník=*socius*] MS・311^v, KS・43^{rb}.

syly [sílý=*valens, pollens, potens*] MS・289^v, KS・24^{rb}.

e) bozyeho [šč. nč: božího=*dei, divinus*] MS・291^r, KS・25^{rb}.

bahnye [bahní=*procreat, edit*] MS・302^v, KS・33^{va}.

7. nč で ou となる音は、sč では、a) 単なる u と、b) uw とで表示された。

- a) budu [sč: budú, nč: budou=*erunt*] MS・308, KS・40^{ra}.
 gsu [sč: jsú, nč: jsou=*sunt*] MS・302^v, KS・35^{va}.
 nageducz [nč: najedouc=*sperans*] KS・26^{ra}, MS・293^v.
 sufati [sč: zúfati; nč: zoufati=*desperare*] MS・317^r, KS・47^{ra}.
 wladnuty [sč: vládnúti=*possidere*, nč: vládnouti=*regnare*] MS・291^r, KS・25^{rb}; MS・302^v. KS・33^{vb}; MS・317^r, KS・47^{ra}.
 zufagycze [sč: zúfajíce, nč: zoufající=*desperans*] MT・196^r.

- b) zaduwczy [zadoucí=*flans*] MS・302^v, KS・35^{va}.

なお、女性形容詞語尾・単数・第四格および第七格（nč では -ou となる）が、-u で表記された。

- plnu [sč: plnú, nč: plnou=*plenam, plenā*] MT²・101^r.
 bezpečnu [sč: bezpečnú; nč: bezpečnou=*tutam, tutā*] MT²・101^r.

8. 短母音 u の代りにしばしば v が用いられた。

- v czrta [u črta, sč=*prope diabolum*] MS・302^v, KS・33^{vb}.
 vprzyemo [nč: upřimně=*directe*] MS・271^r, KS・25^{rb}.
 vrzesez [uřezeš=*resecas*] KS・25^{vb}, MS・293^r.

9. nč の長母音 ú および ů に相当する音は、雑多な方法で表記された。

- a) uo b) v c) vo d) o

- a) buoh [sč: bóh, nč: bŭh=*deus*] MS・311^r, KS・42^{ra}.

これは特に、男性所有形容詞語尾・単数主格（nč では -ŭv となる）に、現われる。

- dywuow [divuv=*miraculi*] MT²・99^r.
 hrzyechuow [hřichŭv=*peccati*] MS・310^v, KS・41^{va}.
 Kristuow [Kristŭv=*Christi*] MS・303^r, KS・35^{vb}.
 zyduow [židŭv=*Judaei*] MS・304, KS・37^{ra}.

- b) vgmy [újmy=*detrimenta*] KS・1^{rb}.

- vraz [úraz=*incommodum*] MS・104, KS・9^{ra}.

- c) zvostaly [zŭstali=*manserunt*] MS・106^r, KS・2^{rb}.

d) *dostoinyesy* [dǫstojnější=*venerabilior, reverendior*] MS・316^r, KS・46^v.

w woly [v vǫli=*in volutate*] MT²・101^r.

wole [vǫle=*voluntas*] MS・289^v, KS・24^{va}.

dowod [dǫvod=*ratio*] MT²・186^r.

また、a) の場合に、uo の代りに o のみが用いられた例もある。

duchow [duchǫv=*amime*] MT²・99^r.

mtow [mtǫv=*impeti*] CT・125^r, OT・123^r.

(mtuow [mtǫv] AT・100^r, MT・103, NT・178^r, PT・163^{rb}, RT・223^v, UT・115^r.)

opilczow [sc: opilcov, nč: opilcǫv=*ebriosi*] MS・308^v, KS・40^{ra}.

yazikow [jazykuv=*lingue*] MT²・99^r.

さらに、男性名詞・複数・第三格の語尾 (nč では -ǫm) が、-om で表記された。

otczom [otcǫm=*patris*] MS・311^v, KS・42^{rb}.

10. y が、nč における a) 短母音 i, b) 長母音 í, c) j にそれぞれ相当する音を表示するために、用いられたことは、上記の I.—5, I.—6 および下記の II.—6 に例示した。

しかし、逆に、nč の y を i で代用させた例もある。*widiemiz* [sč: vyd'miž=*exeamus*] MT・44^v.

なおまた、y が ij に代用された例もある。*py* [pij=*bibe*] MS・290^v, KS・24^{vb}.

11. 長母音 ý を表記する方法には、次のものが見られる。

a) y b) ii c) ij

a) *rownym* [rovným=*aequo*] MS・302^r, KS・33^{ra}.

pycha [pýcha=*superbia*] CT³・134^v.

b) *bezmozkii* [bezmozký=*stupidus*] AT・87^v.

c) *rzadnij* [řádny=*ordinatus*] CT・129^v.

12. ye は、上記 I.—4 に示したように、nč の二重母音 ě を表記するためにも、

また、上記 I.—6 に示したように *ně* の長母音 *i* を表示するためにも、用いられた（用例は当該箇所を参照）。

II. 子音

1. *c* [ts] 音は、*cz* で表記された。

owcze [ovce=*ovis*] MS・302^v, KR・33^vb.

wsrdczy [v srdci=*in corde*] MS・301^v, KS・32^vb.

sebrancz [sč : sebránec=*infans expositus*] CT⁴・112^r.

2. 軟子音 *č* [tʃ] の表記方法は、雑多であった。

a) *c* b) *č* c) *č* d) *č* e) *cy* f) *cz* g) *cž* h) *z*

a) *cistota* [čistota=*mundicia*] MT・186^v.

necynily [nečinili=*non facerunt*] MT²・184^v.

porucenstvie [poručenství=*cura, curacio*] MT・179^r, RT・243.

čtenie [čtení=*leccio*] MT²・101^r.

b) *cwičenie* [cvičení=*exercitium*] MT²・185^r.

dostatečnost [dostatečnost=*plenitudo*] CT・16^v.

pečlywost [pečlivost=*cura*] AT・35^r.

c) *proc* [proč=*quare*] MT²・103^v.

d) *dostatečnost* [dostatečnost=*plenitas*] AT・106^v.

obkliče [obklíče=*circumcludet*] AT・103^v.

e) *cyeka* [čeká=*manet*] PT²・112^vb.

f) *czrta* [sč : črta=*diabolus*] MS・302^v, KS・33^vb.

tuczne [tučné=*pingue*] MS・302^v, KS・33^vb.

chudaczek [chudáček=*vir pauper*] CT²・114^v.

g) *obklicže* [obklíče=*circumcludet*] CT・13^r, MT・169^r.

Pauliczek [Pavliček=*Paulus*] MT・170^v.

h) *statezku* [statečku=*praedioli*] MS・313^v, KS・44^rb.

3. nč における軟子音 d', ě [dj] の表示には、次ぎの方法があった。

a) d b) dy c) die

a) stid [styd'=pude] MS・313v, KS・44va.

b) dyabelsky [d'abelský=diabolicus] MS・315r, KS・44b.

c) widiemiz [sč: vyd'miž=exeamus] MT・44v.

4. g は, e, i, y との前には, nč の j に相当する音の表記に用いられた (これについては, 下記の 6 を参照)。

5. h と ch [x] とが混用された例が, 見られる。

buoch [sč: bóh, nč: būh=deus] MS・332r, KS・59rb.

obhody [obchody=negotia] MT²・123r.

6. nč における j [j] 音は, sč の場合,

1) 母音 a の前では, i により,

2) 母音 e, i, y の前では, g により,

3) 子音の前, および綴尾では, y によって, それぞれ表記された。

1) iakoz [jakož=quemadmodum] MT²・185v.

ia [já=ego] MT²・68r.

2) dawagy [dávají=dant] MS・302v, KS・33vb.

gemu [jemu=ei] MS・302v, KS・33vb.

gym [jím=hoc] MS・302v, KS・33vb.

possluchagij [posluchají=audiunt] MS・302v, KS・35va.

sgiednal [sjednal=convenit] MT²・103r.

3) naymyleysy [nejmilejší=amabilissimus, -um, -a] MS・308r, KS・40ra.

day [sč; nč: dej=da] MS・302v, KS・33vb.

なお, gy によって j を表記した例がある。gyeho [jeho=eius] MS・290v, KS・24ra.

7. k 音を表示するために, c が用いられた例が一つある。

przyklad [přiklad=*exemplum*] MS・316^r, KS・46^{ra}.

8. ヤン・フスは、軟子音 *i*, *i'* [lj] を表示したが⁸, いずれの稿本にもこの表示例は見られない。

9. *nč* の軟子音 *ň* [ɲ] は、次ぎの方法で表記されている。

a) *n* b) *ñ* c) *ñ* d) *ny*

a) *czynte* [činte=*facite*] MT²・68^v.

nan [nañ=*in eo, super eo*] MS・316^r・46^{rb}.

nehynte [nehynte=*nedeficite*] MT²・196^r.

plankami [pláñkami=*vallis*] CT・13^r.

posskwrnuge [poskvrñuje=*maculat*] OT・34^v.

b) *ohnáczek* [sč: ohnaček, nč: ohniváč=*phoenix*] CT・166^v, OT・160^r, UT・153^r.

c) *kazňy* [sč. nč: kázně=*discipline*] MT²・92^v.

d) *ohnyacek* [sč: ohnaček, nč: ohniváč=*phoenix*] E・96^v.

10. *nč* の軟子音 *ř* [rdʒ, rʃ] には、雑多な表記方法が見られる。

a) *r* b) *ř* c) *ř* d) *ř* e) *ri* f) *rs* g) *rz* h) *zr*

a) *nepriezny* [nepřizný=*iniquus, inimicus*] MT²・185^r.

prebiwa [přebývá=*habitat*] MT²・44^v.

pred [před=*ante*] MT・44^v.

řczena [sč: řčená=*dicta*] MT²・179^r.

recz [řeč=*diccio*] MS・302^v, KS・33^{va}.

strednost [sč: střednost=*modestia*] MT²・186^v.

Tri Naboznieho [Tři Nábožního=*trinitas*] MT・54^v.

b) *řadnij* [řádny=*ordinatus*] MT²・101^r.

c) *lekař* [lékař=*medicus*] MT²・103^v.

- d) příkazany [přikázání=*mandatum*] MT² • 101r.
- e) korien [kořen=*radix*] MT² • 186.
- f) ostrsyhayte [ostříhejte=*custodite, attendite*] MS • 255r, KS • 10vb.
- g) berze [sč: beře, nč: bere=*ducit*] MS • 302v, KS • 33vb.
 nehrzyesye [sč: nehřešie, ně: nehřeši=*non peccat*] MS • 302v, KS • 33vb.
 vrzesez [uřezeš=*resecas*] KS • 25vb, MS • 293r.
 przatel [přatel=*amici*] CT² • 114v.
 rzkucz [řkouc=*dicens*] MS • 321r, KS • 51va.
- h) pzrevracenye [převrácení=*perversitas*] PT² • 112va.
11. s 字の用法は、非常に混乱していた。
- 1) 単一 s 音を表記する時に、二重 s を用いた例が少ない。
- missly [mysly=*sensus*] MS • 289r, KS • 24vb.
 otwyssnu [sč: odvisnou=*pendunt*] MS • 289v, KS • 24vb.
 possluchagij [posluchají=*audiunt*] MS • 302v, KS • 35va.
 sslowa [slova=*vocabula*] MS • 302v, KS • 35va.
 sslysseni [slyšení=*audiencia*] CT³ • 130r.
 ssye [sč: sě; nč: se=*se, sibi*] MS • 320v, KS • 50ra.
 yassnieysse [jasnějšě=*clarissime*] CT³ • 136r.
- 2) s 音を表記するために z を用いた例が、見られる。
- nezkrownost [neskrovnost=*amplitudo*] MS • 289v, KS • 24vb.
- 3) s は、
- a) š 音の, b) z 音の, c) ž [dz] 音の表示に、それぞれ用いられ、また, d) zs として z 音を表示した。
- a) nehrzyesye [sč: nehřeši; nč: nehřeši=*non peccat*] MS • 302v, KS • 33vb.
 neslechetne [nešlechetné=*ignobile*] MS • 289v, KS • 24vb.
 sestnacz a sest [šestnáctášest=*sexaginta sex*] MT • 289.
- b) hrosen [hrozen=*ura*] AT • 62v.

ohrysek [ohryzek=*volva pomorum*] AT・21r.
 prasdne [prazdné=*inane*] MS・289v, KS・24rb.
 prochasyete [prochazete=*transite*] MS・309, KS・40ra.
 roschasegy [rozcházejí=*discedunt*] MS・322r, KS・52ra.
 wlesyss [vléziš=*irrepis*] MS・289v, KS・24ra.

c) lsess [lžeš=*mentiris*] MS・300v, KS・31vb.
 se [že=*ut*] MS・306, KS・38rb.
 sena [žena=*mulier*] MS・301r, KS・32vb.
 vrzesez [uřežeš=*resecas*] KS・25rb, MS・293r.

d) mrzskost [mrzkost=*turpitude*] MS・308r, KS・41.

4) 二重 s は、上記の・単一 s 音の表示のほかに、a) š 音の、b) z 音の、c) ž 音の表示にも、それぞれ用いられた。

a) lsess [lžeš=*mentiris*] MS・300v, KS・31vb.
 wlesysse [vléziš=*irrepis*] MS・289v, KS・24ra.
 b) lybessnye [líbezný=*iucundus*] MS・289r, KS・24ra.
 wlessl [vlézl=*irrepsi*] MS・289r, KS・24ra.
 c) muss [muž=*homo, vir*] MS・306, KS・39ra.
 (MS・317v, KS・47ra では、muzz と表記)。

12. nč の軟子音 š [ʃ] を表記する方法も、雑多であった。

a) s b) ś c) ss d) z e) cz

a) 上記 11—3) — a) のほかに、

hrziesny [hřišný=*impius, peccatus, peccator*] MT・103r.
 mastalerz [maštaleř=*stabularius*] CT²・22r.
 speherz [sč: špeheř=*explorator*] MT²・54v.
 wselike [všelike=*quodque*] MT²・131v.

b) śybalstwie [šibalství=*lascivia*] AT・113.

c) 上記 11—4) —a) のほかに,

wssudy [všudy=*ubique*] MT²・169r.

sslysseni [slyšení=*audiencia*] CT³・130r.

sstiedrost [štědrost=*liberalitas*] NT³・128r.

yassnieysse [jasnějšě=*clarissime*] GT³・136r.

d) vrzesez [uřezeš=*resecas*] KS・25rb, MS・293r.

zczastne [št'astné=*felix*] PT・167rb.

e) lepczye [lepší=*melior*] MS・311v, KS・42va.

13. nč の軟子音 t', t [tj] は次ぎのように表記された。

a) t b) ty c) c d) ě e) cz

a) mnet [mnet'=me, mei] MS・302v, KS・33vb.

wzdyt [vždyt'=semper] MS・302v, KS・33vb.

yat [ját'=ego] MS・302v, KS・33vb.

b) krzestyan [křest'an=*christianus*] MS・307r, KS・39rb.

nestyastnj [nešt'astný=*infelix*] MS・308r, KS・39rb.

c) sscepeni [štěpení=*discordia*] CT³・32r.

d) zčastne [št'astné=*felix*] AT・104v.

e) zczastne [št'astné=*felix*] PT・167rb.

14. v が^s, 母音 u の表示に用いられた。

v czrta [u črta=*prope diabolum*] MS・302v, KS・33vb.

vkazuge [ukazuje=*ostendit*] MT²・103r.

vprzyemo [sč: upřimno, nč: upřimně=*directe*] MS・291r, KS・25rb.

vzitek [užitek: *utilitas*] MT・186r.

15. nč の v に相当する音は, w によって表示された。

dawagy [dávají=*dant*] MS・302v, KS・33vb.

- krawy [kráry=*vacce*] MS・302^v, KS・33^vb.
 owcze [ovce=*ovis*] MS・302^v, KS・33^vb.
 sslova [slova=*vocabula*] MS・302^v, KS・35^va.
 wladnuty [vládnuti, sč=*possidere*] MS・291^r, KS・25^rb.
 wsrdczy [v srdci=*in corde*] MS・301^v, KS・32^vb.
 wzdyt [vždyt'=*semper*] MS・302^v, KS・33^vb.

16 z は, a) č 音の, b) s 音の, c) ž 音の, 表示のために, それぞれ用いられた。

- a) statezku [statečku=*praedoli*] MS・313^v, KS・44^rb.
 b) nezknownost [neskrovnost=*amplitudo*] MS・289^v, KS・24^rb. (上記, 11—2)).
 c) bozie [boží=*divinus*] MS・302^v, KS・35^va.
 wzdyt [vždyt'=*semper*] MS・302^v, KS・33^vb.
 zadne [žádné=*nullum, non ullum*] MS・319^r, KS・48^vb.
 zbozie [zboží=*dominium, pecunia*] MS・302^v, KS・33^vb.
 ze [že=*ut*] MT・196^r, MS・293^r, KS・25^rb.
 zywocznych [živočich=*animal*] MS・313^v, KS・44^va.

17. 軟子音 ž の表記方法も, 雑多であった。

- a) z b) ž c) s d) zz

a) 16—c, の用例のほかに,

- lezy [leží=*positus est*] CT⁴・172^v.
 w temz [v témž=*in quo*] MT・99^r.
 zadost [žádost=*peticio*] MT²・51^r, MT²・186^v.
 zalozenie [založení=*constitutio*] MT²・186^v.
 zenienye [ženění=*nuptia*] CT²・18^r.
 b) žadost [žádost=*peticio*] MT²・51^r, MT²・186^v.
 zdržedlnost [sč; nč: zdrželivost=*abstinencia*] MT・186.

c) 用例は, 上記 11—3) のほかに,

wasyss [sč: vážíš=*pensas*] MS・304^r, KS・37^{ra}.

d) dobrozzadost [sč: dobrožádost=*peticio bonorum*] UT・24^v.

nezz [než=*quam*] MS・302^v, KS・33^v.

zze [že=*ut*] MS・302^v, KS・33^v.

もっとも、二重 z が単一 z 音を表示するにすぎない例も見られる。

mrazz [mráz=*frigus*] MS・308^r, KS・39^{rb}.

oplzzost [oplzlost=*impudicitia*] MT²・185^r.

注

- 1) これは、フライシュハンスの手で、次ぎのように刊行された。
'Mag・Io. Hus Sermones in Bethlehem. 1410—1411.' I—V.
Vydal Václav Flajšhans. Praha, 1938—47.
- 2) これは、チェコスロヴァキア科学アカデミーから、次ぎのように刊行された。
'Sermones de Tempore qui Collecta dicuntur.' Ed.
Anežka Schmidtová. »Magistri Iohannis Hus Opera
Omnia. Tom. VII. ČSAV.《 Praha, 1959.
- 3) もちろん、これら諸稿本の内容は、ラテン文を主体とするが、その間に稿本作成者によって多数のチェハ語が挿入されている。

II—2

ヤン・フスは、その『アベツェ¹⁾ダ』を、次ぎのように構成した（下部の [] 内は、nč 字母によってこれを書き換えたものである）。

a	b		c	ó
A	bude	(w foudný den)	celé	čeledi
[A	bude	(v soudním dnu)	celé	čeledi

d	đ	
(wfem fwatým)	dáno	ďedictwíe (nebefké králow[ftvíe) [;]
(všem swatým)	dáno	dědictví (nebeské království) [;]

e	f		g		h
ej	farář	(Gežíš kniež) [;]	genž	(geft)	hofpodin
ej	farář	(Ježíš kněž) [;]	jenž	(jest)	hospodin

i y k l í
²⁾
 ili y (také) král lidí [;] íákán (od
 čili i (také) král lidí [;] lákán (od

m n ñ
 dyabla a od kniežie) mnoho nás niekdy [;]
 d'abla a od kněží) mnoho nás někdy [;]

o
 on (t. w ňem budeme na vieky bydleti)
 on (t. v něm budeme na věky bydleti)

p r ř
 pokog rád (dobrovolnie) rádem (bez
 pokoj rád (dobrovolně) řádem (bez

ſ f
 hřiechu) ſloužil (každému človieku) [;] flechetný
 hřichu) sloužil (každému člověku) [;] šlechetný

t ṭ u
 (wřie ctnostie) tak ietlestný ukázav
 (vší ctností) tak tělesný ukázav

v
 (ſwými ſkutky) velikost (božſtvie y človiečienſtvie)
 (swými skutky) velikost (božství i člověčenství)

w x z
 w ſobie xil (když duſi puſtil) za ny
 v sobě xsil (když duši pustil) za nás

ž ch

žiwotem chtë, (nás špajiti), genž geft konec

životem chtë, (nás spasiti), jenž jest konec

[ě]

y počátek (všeho dobrého) požehnaný na vieky.

i počátek (všeho dobrého) požehnaný na věky.]

この『アベツェダ』は、民衆教育のために、次のような宗教的意味を含ましられて、構成された。

‘しかして（審きの日に）なべての僕（聖なる者）に 相続（天の王国）与えられん。みよ 民を牧する者（聖職者イエス）そは 民の主 すなわち民の王なり。われらは 多く 時ありて（悪魔と聖職者とによりて）惑わさる。かれ（すなわちわれらが永遠にそのうちにある者）は 平安にして よろこび（すすみて）（罪を伴わざる）掟てにより なべての者に 仕えたりき。かくも（徳にみち）高貴にして しかも肉をもてる者は（神性と人間性との）偉大さを（自らの行ないによりて）自らのうちに示しつつ（息絶ゆる時）（われらの救済を）ねがい いのちかけてわれらのために 嘆きたりき。（なべて善なるものの）始めにして 終りは これなり。’

ところで、nč のアルファベタは、

短母音 a [a], 長母音 á [a:], b [be:], c [tse:], 軟子音 č [tfe:], d [de:], 軟子音 d', đ [dje:], 短母音 e [e], 二重母音 ě [ie], 長母音 é [e:], f [ef], g [ge:], h [ha:], ch [xa:], 短母音 i [i], 長母音 í [i:], j [je:], k [ka:], l [el], m [em], n [en], 軟子音 n [en], 短母音 o [o], 長母音 ó [o:], p [pe:], q [kve:], z [er], 軟子音 ř [er̩, er̩̊], s [es], 軟子音 š [eš], t [te:], 軟子音 t', ě [tje:], 短母音 u [u], 小線付き・長母音 ú [u:], 小円付き・長母音 ů [u:], v [ve:], 二重 w [ve:], x [iks], 短母音 y [i], 長母音 ý [i:], z [zet], 軟子音 ž [džet],

であって、これをヤン・フスのそれに比較する時、両者の間には、フライシュハンスが指摘する四点の差異をも含めて、以下のような相異がある。

1. のちの『チェハ語正字法』では、á, é, í, ó, ú, ý の・nčにおける‘小線付き・長母音’がすべて使用を提唱されるのであるが、『アベツェダ』では、そのうち ó と ú, および nč が持つ‘小円付き・長母音’ǔ とが、姿を現わしていない。

ǔ については、ヤン・フスはこれの使用に思い至るはずもなかったが、しかし前者の・六つの‘小線付き・長母音’は、『アベツェダ』の制作期にすでに、彼の中に着想されていたと推定してよいであろう。

2. 『アベツェダ』では、nč の長母音 í は、ie で表記されていた (božství, človiečienství, ctnost, dědictví, hřích, kníže, království, wšie)。

3. 『アベツェダ』では、nč の ě は、軟子音の後にある場合以外は、ie で表記された (človiek, človečienství, dobrovolnie, kniež, knieže, sobie, tieľstný [nč = tělesný], vieky)。

4. 軟子音の後に立つ時は、nč の ě は、単に e で表記された (dědictví, někdy, chte)。

5. また、『アベツェダ』では、ě は、ch と共に、アルファベタの最後におかれている。

6. nč における g 音は、『アベツェダ』には欠けている。

7. 『アベツェダ』では、g は、e, i の前にあっては nč の j に相当する音の表記に用いられている。

(これにたいして、『チェハ語正字法』では、nč におけるとひとしい j 字母使用が規定される。)

8. 従って、『アベツェダ』には、j 字は、間投詞 ej に現われるにとどまり、字母としては扱われていない。

9. nč の q 字母も、『アベツェダ』には、存在しない。

10. 『アベツェダ』は、語の綴頭・綴中には j を、綴尾にのみ s を、それぞれ使用している。

11. nč では w は、外来語においてのみ用いられるが、『アベツェダ』では、母音に先行する場合には v を、しからざる場合には w を v の代りに、それぞれ使用する、という区別が立てられている。

12. nč は、軟子音の表記符号として ˇ (haček = ‘小鉤’の意) を用いるが、『アベツェダ』は、・ (nabodeničko = ‘小点’の意) を用いた。

13. 『アベツェダ』に現われる i 字母ならびに i 音は、nč にはもはや存在しない。

以上にあげた・両者間の・少からぬ相異にもかかわらず、さきに『アベツェダ』を構成する文章の・nč 字母にする書換えによって承知されたとおり、この相異も、ヤン・フスにおけるアルファベトと nč におけるそれとの間にある大同を妨げるものではない。とりわけ、すでに前第Ⅱ節— 1 で見たように、乱雑・混乱をきわめた・当時の表記方法に対比する時、ヤン・フスのアルファベタは、まことに単一・明確であって、チェハ語表記法上の・画期的な事業であるばかりでなく、まさにこれこそが、nč アルファベタの基幹を形づくった、と評してよいであろう。

ノヴォトニーが、ヤン・フスの中に〈チェハ文章語の創造者〉を見たのも、その理由によるものであるし、また、フライシュハンスは、『チェハ語正字法』への“序文”の中で、ヤン・フスの功績を、次のようにたたえている。「ヤン・フスの正字法は、…チェハ語一般を支配し、のちには、クロアチア語、スロヴァキア語、ラウジッツ語、部分的にはポーランド語にも受け入れられ、現在、全チェハ語の科学的書法として採用されている。音のとおりを書く、—— 一音一文字という・フスの原則は、最も広汎な民衆層の教育を著しく容易にし、今日なおフスの榮譽となっている」³⁾。

ところで、母国チェハ語の表記方法の統一・純化を求めるヤン・フスの工夫が、乱雑をきわめた表記現実の克服に理由を持つものであったとしても、その混乱が生ずるに至った・いま一つ深い原因は、どこにあったのであろうか。

ヤン・フスが『チェハ語正字法』でまず語ろうと志したのは、まさにその消息であった。

注

- 1) 『アベツェダ』には、‘トゥシェボニェ稿本’のほかに、六種の稿本が存在する (Bartoš: op. cit. str. 101).

ここでは、フライシュハンスが再録した・二種の『アベツェダ』(Flajšhans: Mistr Jan Hus. str. 273; Mistra Jana Husi sebrané spisy. Svazek V. str. 18) と、ドブロフスキーの再録にかかる‘ブロスチエヨフ刊本’のそれ (Dobrovský: Gesch. d. böhm. Spr. str. 304) とに、依拠した。

- 2) ヤン・フスがここで用いた ili [=seu] は、セルボ・クロアチア語である。
3) Mistra Jana Husi sebrané spisy. Svazek V. str. 106.

III

『チェハ語正字法』¹⁾の導入部で、ヤン・フスは述べている、「もし、チェハ人が自己固有の文字を持ち、われわれの国語に特有な字母を持っているのであれば」、チェハ

語表記のためにラテン語字母の上にこのような・特別な工夫を凝らす必要はなかったであろう、と。つまり、『チェハ語正字法』が制作されるさいの・最も基本的な立場は、チェハ語が、スラヴ語系に属しながら、しかしその表記のためにはラテン語字母を使用せざるをえない、という矛盾の自覚であることは明らかである。

もちろん、この矛盾は、単にスラヴ語対ラテン語の関係においてばかりでなく、広く各国民語とラテン語表記体系との間の矛盾として、とらえられている。このことは、ヤン・フスが、——ラテン語文字が、ギリシア人、イスラエル人、ドイツ人にとって不十分であるのと同じように、それが「チェハ人にとっても不十分であるところから、チェハ語でものを書く人々の間に、互いに食い違いが出てきたり、過った綴字が行なわれ、このために発音の上にも読み方の上にも困難が生じている」——と語っている一文に見られるとおりである。

すでにブラハのエマウゼ修道院で、古スラヴ語、グラゴール（フラホール）文字を研究していたヤン・フスの心をとらえたのは、ラテン語字母によっては表記し尽せぬ・チェハ語の個性であり、両者の矛盾が必然的にうんだ・チェハ語表記の混乱への憂慮であった。このところから、われわれは、『チェハ語正字法』の基本的立場を、支配的国際語であるラテン語にたいしてチェハ国民語の固有性を主張する、という意味で、ヤン・フスにおける文化的ナショナリズムと言いかえることができる。

ところで、『チェハ語正字法』には、なお、第二の立場がある。それは、ヤン・フスが、上のように国語の個性を強く自覚しながらも、しかし、チェハ語特有の音を表示するための「新しい文字の造形は、教育にとっても、書物の翻訳にとっても、困難を齎らすことをおそれて、これを避けた」、と述べているところに、おのずから語られている。つまり、それは、『チェハ語正字法』が、母国語学習の教授方法の基幹たろうとする立場である。なぜなら、ヤン・フスは、この正字法によって、「青少年にとって、読み方がたやすくなり、綴字についても混乱が生じなくなる」ばかりでなく、一般にチェハ人にとって、国語を「敏速に書き・読むところの平易性」が獲得され、「的確・敏速に読む」可能性が保証されることを、志したのであった。‘教授と学習とにおける平易・的確・敏速’の原則は、のちにコメンスキーにあって教授方法の指導理念とされるのであるが、われわれは、それがすでにヤン・フスの求めるところであったことを、知るのである。

さて、『チェハ語正字法』の本論は、チェハ語（ならびにイスラエル語、スラヴ語、ドイツ語）の・ラテン語にたいする固有性を、ch [x] 音および š, ſ [ʃ] 音を表記するに足るラテン語文字の欠如の指摘から、始められている。

ラテン人ももちろん、ch と続けて表記し発音することは、chamus, michi, nichil, Michael などの語に、明らかであるけれども、しかしその発音は、チェハ語の場合と異なる。すなわち、ラテン人は多様の種族からなり、従って上掲例語の発音も多様である。あるものは、これらをそれぞれ kamus, miki, nikil, Mikael と発音し、またあるものは、c-hamus, mic-hi, nic-hil, Mic-hael と発音して、c の音を正しく保存するが、しかし他の種族の間では c の音は殺されて hamus, mihi, nihil, Mihael となる。しかし、いずれの場合にも、ラテン人の間では、チェハ語 ch の持つ音 [x] は、聞かれないのである。

ヤン・フスは、このチェハ語の ch 音を表記するために、しかし、上述のように「新しい文字を造形する道を避けた」。彼は、ラテン人の使用する ch の文字を採用するのであるけれども、そこへチェハ語 ch 音の発音方法の指示を加えたのである。「この発音は、舌を口蓋から離し、発音の終りに舌を下の歯の根もとに軽くあててまるめると生ずる」。

ヤン・フスの『チェハ語正字法』の卓越性の一つは、それが、各子音と諸母音との結合関係を、語の綴頭・綴中・綴尾のおのおのについて規則化して、例示したところにある。

上の ch については、こう規定される。「これは、チェハ語の場合、i を除く全母音と結合する。ただし、i の代わりに y とは結合する」。a との結合例は chalupa [= casa], e との結合例は chechet [= risus valdus], y との結合例は chyse [= tugurium], o との結合例は chod [= icio], u との結合例は chudý [= pauper] である。

しかし、この ch も、「綴尾では、i を含む全母音のあとにおかれる」。a のあとの例は hrách [= pisum], e のあとの例は lech [= praesus], mech [= muscus], i のあとの例は lich [= turpitudine], liché [turpe], mnich [monachus], o のあとの例は roch [= turricula], doch [= stramentum], foch [= malorum], u のあとの例は buch [= bum !], duch [= spiritus], y のあとの例は psych [= iniuria], pýcha [= superbia], kych [= sč: sternutacio, ně: kých] である。さらに、ch は、綴中でも全母音の前に立つ。

この ch に即して、ヤン・フスは、いま一つ、ラテン語体系にたいする・チェハ語の特性の指摘を試みている。チェハ語は、母音を媒介とせず四ないし五箇の子音が連続する語を持つのであるが、ヤン・フスは、これを、ch を含む語例によって示すのである。「母音なくして綴字はありえぬ、という・ラテン語の規則に反して、〔チェハ語は〕母音がなくても、綴字・語をつくる」。これの例としてあげられるのは、ch-

rt [=vertagus], krch [=coemeterium], mrch [=corporum epulorum], wrch [=culmen] である。もちろん、これらのほかにも prft [=digitus], smrt [=mors] など、多くの・こうした語が存在するのであって、ヤン・フスは、「これらの語を、母音を入れて発音すれば、チェハ人が、聞いていて笑い出すことは、うけあいである」と述べている。

以上のように、ヤン・フスは、まずラテン語にたいするチェハ語固有音の一つである ch 音をとりあげたのち、次ぎに、他の固有音——ch と共に最初指摘された š, f 音を含む・一連の軟子音——の表記方法を、提示する。すなわち ě, d, i, n, f, š, f, t および z が、これである。

われわれは、すでに、十五世紀のチェハ語にあっては、上記の軟子音の表記が、いかに乱雑な様相を呈していたかを知っているのであるが、ヤン・フスは、この現実にたいして、‘字母上の小円点’によって、ラテン語規則によって発音される諸子音 (c, d, l, n, r, s, f, t, z) と、チェハ語規則に従って発音される上掲軟子音とを、区別して表記する、という方法を考案した。これはまことに明快・単純な方法である。「上掲文字 [c, d, l, n, r, s, f, t, z] のいずれかの上に、円点をおかなければ、ラテン人の発音と同じくなる。点をおけば、チェハ語規則による発音になる³⁾」。そして、ヤン・フスは、この相異を、以下の対比で示した。

- | | | |
|-------|--------------------|-----------------------------|
| c. | cizí [=peregrinus] | Čech [=Bohemus] |
| d. | den [dies] | ďelo [=tormenta] |
| l. | lich [turpitude] | lyko [=suber] |
| n. | nos [=nasus] | peň [truncus] |
| r. | rád [=hilare] | řád [=ordo] |
| f, s. | fukne [=tunica] | řidlo [=sabula] |
| t. | trďlo [=clava] | řiché [=quietum, ně: tiché] |
| 3. | zúfalý [=malus] | život [=vita, corpus] |

『アベツェダ』に姿を現わした・一連の軟子音は、この『チェハ語正字法』で上の対比を通じて、一段と体系化されて、ně の表記方法の基礎となった。

このあと、ヤン・フスは、a と b については省略し、前述のように、ě, c 以下の子音の・諸母音との結合規則を述べていく。

まず、ě は綴頭の場合、a のまえ (例: čakai [mane ! ně: čekej !]), e のまえ (例: Čechu [=Bohemi]), i のまえ (例: činy [=acciones]) には、それぞれ立つが、

しかし、o と u とのまえに立つことは、——とくにモラヴァ人の場合に——稀である。しかし、綴尾では、o, u を含む全母音のあとに現われる。a のあと (例: plác [=lacrimacio]), e のあと (例: leč [=nisi]), i のあと (例: klíč [=clavis]), o のあと (例: moč [=urina]), u のあと (例: luč [=taeda])。

上のような ě の規則にたいして、c は綴頭にあって全母音のまえに立つ。a のまえ (例: calta [=crustula]), e のまえ (例: cecík [=papilla]), i のまえ (例: ci-zí [=peregrinus]), o のまえ (例: co si [=quid es]), u のまえ (例: cudný [=castus])。また、c は、綴尾でも、全母音のあとにくる。a のあと (例: plac [=area]), e のあと (例: lec [=fornax]), i のあと (例: plíc [=pulmo]), o のあと (例: noc [=nox]), u のあと (例: tluc [=pulsus])。

ここで、ヤン・フスは、c について、チェハ語字母 c の発音とラテン語字母 c の発音との相異にふれ、「ラテン語の場合に a, o のまえでは失われてしまった・本来の音を、c は、チェハ語では相変らず保持している」と述べ、また、「c は、ラテン語の綴尾では、本来の発音を失って、k の音となる」(例: lac, alec) とししている。これは、実は、のちにチェハ語字母 k についての叙述の中に現われるように、チェハ人の青少年にラテン語を学習させるさい、綴頭および綴尾のラテン語字母 c を k に書換え k と発音させ、これによって、チェハ語字母 c の発音との混乱を防ぐ、という・彼の提案の伏線の役割を果たしていると考えられる。

次に、d は、綴頭では、i を除く母音と並置される (例: da1 [=davi], dedek [=upapa], dobrý [=bonus], dub [=quercus])。d が綴頭で、i と並ぶことは、稀であるが (例外: Dioniz [=Dionysus]) しかし y と並ぶことは通例である (例: dým [=umus])。これにひきかえ、綴尾では、d が、他の母音のほか、i のあとにも立つことが通常であって (例: hlád [=famus], led [=glacies], lid [=homo], rod [=nacio], chud [=homo pauper]), むしろ、y のあとにくる例の方が稀である (例外: ťtyd [=gelacio])。

ď は、主として、母音 e, i のまえに立つ (例: device [=virgo], ďedictvie [=hereditas], diw [=miraculum], ďiek [=gracia])。少くとも、マジャール語の do, du のように、o, u のまえに ď がくる語は、チェハ語には皆無である。

ď と母音 a との結合について、ヤン・フスは、「少くともチェハ語では、ďábel [=diabolus] の語のように、a のまえに ď をおいてもよいのではないか」という主張を持った。前掲のように、diabolus は、sč では dyabel のほか、diabel, diábel と表記されていた。これは、ď 音の表記方法が存在しなかったことに関係する、と考え

るほかないのであるが、しかし、nčでは、まさにヤン・フスの主張したとおりに d'ábel と表記されているのである。

ヤン・フスによれば、軟子音 d の表記方法については、彼の工夫のほかに、d のあとに i をおき、それに他の母音を添える方法（例：dia-, die-）も、考えられた、という。このことは、われわれもまた一例についてながら見たのであるが、この方法は、——i が、発音にさいして大部分吸収される、つまり i が子音化して j 音となり、従って deva [=puella] は、dieva とは書かれるが、しかしその発音は djeva と響く、——という音声学的考慮を伴っていた、とヤン・フスは述べている。しかしながら、彼は、あえて d による表記方法をとった。その理由は、‘dia-, die-’ 論者の主張も、所詮は音声学的に d に帰着する、という理論的な判断であった、と言わざるをえない。彼が、慣行的な ‘dyabel’ 表記を覆して、「いずれにせよ、どのような場合にも y と一諸に d を書かぬように憶えておくことが必要である」、と断言した背後に、われわれは、ノヴォトニーと共に、ヤン・フスの‘高度の理論的能力’を見るべきであって、彼の主張した ‘d'ábel’ 表記が nč に保存されている理由も、そこにある、と言えよう。

ところで、d は、綴頭では上のような制約を受けるけれども、綴尾にあっては、全母音のあとに立つ。a のあと（例：mlád [=iuventus]）、e のあと（例：ved [=duce], hled [=vide]）、i のあと（例：klid [=mete]）、o のあと（例：rod [=genera]）、u のあと（例：sud [=iudica], hud [=figella]）。

チェハ語では、f を含む語は、ufám [=confido]、およびこれから合成される語、neufám [=diffido]、doufám [=spero]、zúfám [=despero]、あるいは fi [phui !] など、多くを数えないのであって、f は、むしろ外来語に用いられる（例：fik [ficus], Filip [=Philippus], farát [=sacerdos]）。注意すべきは、チェハ語の場合、p+h によって f 音を表示することは全くなく、外来語もすべて f で表記される、ということである（例：Philip→Filip、フェニキア語 phaggim に由来するラテン語 ficus→fik、ドイツ語 Pfarrer→farát）。

なお、f は、綴頭にあっては、o, e 以外の母音と結合する。u と結合する例としては、fúká [=flat], fúk [=ventus] がある。

R. キューナーは、ラテン語字母の発音を論ずるさいに、「e および i のまえの g は、後期ラテン語では摩擦音 j に発展し、ロマン諸語の場合には全くラテン語 j と同じに取扱われる」と注記している。⁴⁾ ヤン・フスもまた、軟音 g を硬音 g から区別した。しかし、彼が区別した軟音 g は、キューナーのしるすものとは異なる。

すなわちヤン・フスは、母音 a, o, u のまえに立つ g (例: *gaudium*, *Golias*, *gustus*) を硬音 g とし、これにたいして母音 e, i のまえにある g (例: *genus*, *gigno*) を軟音 g として、両者を区別した。そして彼は、「チェハ人は、硬音 g [nč における g 音] を必要としない。……チェハ人が書物を読む場合には、Og [Gog], Magog のようなイスラエル語名詞を読まねばならないが、この場合には、必要に応じて軟音 g に硬さを加えなければならない」と述べているのである。彼のいう軟音 g とは、*hus* [= *ausrorum*] となる *gus*, *hubí* [= *delet*] となる *gubí*, *húba* [= *os*] となる *gúba* にそれぞれ現われる軟音 g であり、すなわち a, o, u の前でも h 音に転ずる g 音である。ヤン・フスは述べている、——モラヴァ、チェハへのキリスト教伝来にまつわる伝説に登場する聖ヴァーツラフの母 *Dragomír* は、今では *Drahomír* と発音されている。またかつてチェハ人は、*bóg* 語を話しており、そこから *Bogemus* と呼ばれたが、今ではそれは *bóh* 語と呼ばれ、このところから *Bohemus* の名称が出てくる。同ように、かつての *Praga* はいまチェハ語では *Praha* である——と。しかし同時に、ヤン・フスが、キューナーの伝える ‘j 音化した g’ を知っていたことも、『アベツェダ』で自ら e, i のまえでは j でなく g を用いたところから、明らかである。

ところが、ここで注目すべきことは、彼の中に、この時すでに、g によって j を表記する方法は廃すべきであり、j を用いる方法こそ正当である、とする思考が生じていたという点である。すなわちヤン・フスは、*iaculum*, *iocus*, *iustus* の場合の i を子音 j に相当させた「ラテン人にならって」、チェハ語においても、i を綴頭で j とし (例: *Jan* [= *Johannes*], *Jakob* [= *Jacob*], *Jarek*)、綴中で j とし (例: *Trajan*, *Burjan*, *Pabjan*)、綴尾でも同じく j とする (例: *mói*→*mój* [= *meus*], *tvói*→*tvój* [= *tuus*], *lói*→*lój* [= *sebum*]) ことを提唱した。そして彼は、この表記方法における・画期的な変換について、「以上の語は、[軟音] g を用いても書かれようが、——例えば、*Gan*, *Gakub*, *Garek*; *Trogan*, *Burgan*; *móg*, *tvóg*, *lóg*,——しかし、このような書法は、すでに廃され、前者 [j] を用いる方が、ヨリふさわしいのである」と述べている。

この変換は、『アベツェダ』に比べて『チェハ語正字法』を一段高みにおく点の一つであり、nč における j 字使用の基礎を据えたものであることは言うまでもないが、当時の表記方法における・j 音に相当する軟音 g の支配を排して、この変換にヤン・フスを導いたものは、やはり硬軟両用の g 字使用を避けて、単一な表記方法をチェハ語音 j に与えたい、という思索であったろう。

スラヴ人が持たぬチェハ語の *h* は、綴頭では *i* を除く全母音に先行する (例: *had* [=anguis], *herink* [=herenga], *holub* [colomba], *húba* [=os])。 *i* に先行するのは、女の・高い笑声、馬のいななきを表わす *hi*, *hi*, *hi* の場合のみである。しかし *h* は、綴尾では全母音に後続する (例: *práh* [=limen], *leh* [=cubitus], *mih* [=momentum], *roh* [=versura], *luh* [=pasava])。綴中では、*h* は *i* を除く全母音のまえに立つ。しかし *y* に先行することは、綴頭 (例: *hybieti* [=evanescere]), 綴中 (例: *zahynúti* [=examinare]), 綴尾 (例: *druhý* [=secundus]), いずれの場合にも見られる。

われわれは、*sč* における *i* と *y* との混用についてすでに知った。ヤン・フスは、この混用にたいして、両者の区別を主張し、「*i* の代りに *y* を書くことも、その逆であってもならぬ」と指示し、さらに加えて、*y* はそれが単独で用いられる・二つの場合、——すなわち、一つは驚嘆の副詞として用いられる場合 (例: ‘*y dieš ty to?*’ [=‘*sic dicis tu?*’]) 二つには、接続詞として用いられる場合 (例: ‘*vy y oni dobře fte včínili.*’ [=‘*tu illique bene fecerunt*’]) [*nč* では、この・いずれの場合にも、*y* ではなく、*i* を用いている] ——を除いて、「語の初めに書かれることはない」と定めている。もちろん、綴中・綴尾に *y* が用いられる例は多い (例: *ýko* [=suber], *mýdío* [=sapo]; *druhý* [=secundus], *hrubý* [=crassus], *chudý* [=pauper]; *ty* [=tu], *vy* [=vos], *my* [=nos])。

次に、*k* は綴頭、綴中、綴尾のいずれにあっても、母音 *a*, *e*, *o*, *u* のまえに立つが、*i* のまえに置かれることは稀であり (例外: *kirchov* [=coemeterium]), *y* のまえにくることは *i* の場合より多い (例: *kabát* [=tunica], *kéz* [=utinam], *kobyła* [=equa], *kuklík* [=‘cappatus’→monachus], *kys* [=fermentum])。

チェハ語の *k* については、ヤン・フスはこれ以上述べる必要を認めないのであるが、この *k* に関連して、彼は一つの・注目すべき提案を行なっている。

すなわち、*k* 音を帯びたラテン語字母 *c* とチェハ語字母 *c* との・発音上の相異にかんがみ、ヤン・フスは、青少年にラテン語を教授させるさいには、当該ラテン語字母 *c* を *k* に書換えて教授を行なうことを提案したのである。(例: ‘*casta caritas cara est deo.*’ を ‘*kasta karitas kara est deo.*’ に、また、‘*lac et alec placent esurientibus.*’ を ‘*lak et alek placent esurientibus.*’ と書換える)。

その提案の理由は、前にふれたとおり、やはりラテン語字母の発音と同形のチェハ語字母のそれとの混同を避ける、という教授方法上の工夫にひそんでいる。彼は言っている、「もし、これらの [ラテン] 語を文字 *c* で書けば、綴字を学ぶ・若い人々は、文字 *c* がチェハ語本来の音を持つものと考えて、次ぎのように発音するだろうから

である。‘czasta czaritas czara est deo.’ ‘lacz et alecz placent esurientibus.’」。
 ‘k 音を持つラテン語文字 c の k 字書換え’という・大胆な提案と工夫が、それによって「若い人々にとって読み方が、やさしくなり」、「若い人々が綴字について混乱することが、なくなる」ことを目指した・ヤン・フスの・いわば教授学的配慮を表現している点を、われわれは重視したいのである。

ヤン・フスが sč の字母中に数えあげた ⁵⁾ i とその音とは、もはや nč には存在しない。この i は、現在、スロヴァキア語の中に l' として、またポーランド語の中に ⁶⁾ i として保存されているものと同一の音であったのであろう。ヤン・フスは、かつて sč の中に存在しながら、特有の表記方法をなんら与えられなかった・この音に、アルファベータ上の位置を与えたのである。

しかしながら、われわれが彼から知りうるのは、ただ、l と i との・それぞれの発音方法のみにすぎない。すなわち、l 音は、舌を上口蓋につけることによって得られるが、i 音は、舌端を下の歯の根もとにつけ、上歯を下歯よりも前方に出すことによって得られるのである。

なお、l と i とはともに、綴頭、綴中、綴尾のいずれにあっても、全母音と並置されるが、しかし l+a となることは、i+a となる場合よりも稀である、とヤン・フスはしるしている。

軟子音 ñ が、綴尾において、a と共に発音されるのは（例：maña [=manna]）、ポーランド語風の発音であって、チェハ語では稀である。ñ は e と共に現われて、例：Nemec [=Teutoni, nč: Němec] となる。ただし、ñ と e との間に i がはいる場合には、i+e は í 音となる。

ñ は、綴尾にあっては全母音のあとに現われる。a のあと（例：bán [=dolium], chañ [blandiri]）、e のあと（例：peñ [=truncus]）、i のあと（例：viñ [=inculpa]）、o のあと（例：hoñ [=venare], poñ [=tamen], Hrdoñ）、u のあと（例：fuñ [=ictum inflige]）、y のあと（例：tyñ plot [=saepi], hyñ ve zlém [=peri peccato]）。

次に、p は、綴頭、綴中、綴尾のいずれにおいても、y を含む全母音と共に発音される。

ラテン語字母 q について、ヤン・フスは、これを「チェハ人に必要がない」ものとするばかりでなく、ラテン語字母中からもこれを排除し、k によって代用させることを提案している。（例：quoniam を koniam に、quam を kvam に、que を qve に、linquo を linko に）。この提案の狙いもまた、青少年のラテン語学習から発音の困難を除去するところにあった。

r は綴頭、綴中、綴尾いずれにおいても、i を除く他の全母音と共に発音される。i の代りには y が、r と共に現われる（例: ryby [=piscēs], káry [=carrus], páry [=lectus], máry [=feretrum]）。

軟子音 ř は、o と y とを除いて、他の全母音と共に現われる（例: řád [=ordo], řeve [=boat], řek [=dicio], říg [řij,=boacio], ve křu [=in frutice]）。

s は綴頭、綴中、綴尾のいずれにあっても、全母音と共に発音される。y のまえに立つ例としては řyn [=filius] があり、y のあとにくる例としては kys [=fermentum], lys [=calvus] がある。

ただヤン・フスは、すでに見てきたように、ř と s との用法を区別し、前者は綴頭と綴中とに、後者は綴尾に、それぞれ用いるように指定している。

これに応じて、軟子音も ř と ř との両字母を持つ。ř の用例としては, řach [=lusus latrancularius], wřecho [=omne] があげられる。綴尾の ř は全母音のあとにくる（例: řás [=habes], řás [=extingue], veř [=omnes], piř [scribe], noř [=porta], duř [=suffoca], řuř [=sicca], myř [=mus]）。

t は綴頭、綴中、綴尾いずれにあっても、i を除く他の全母音と共に響く。綴頭の例は táta [=pater], ten [=ille], pit [=bibendum], to [=illud], tu [=illam, ibi] であり、綴尾において y に先行する例としては, ty [=tu], rty [=auxilia], kýty [=clave] がある。

上述のように、t が i と共に現われることは、きわめて稀であるが、これにひきかえ軟子音 ř は、i と共に現われる例を最も多く持つ（例: řiti [=bibere], řliti [=execrari], řriti [=infervere]）。しかしながら、y と並んでは決して現われない、という点では ř は ř とひとしい規則に服する。

そのほか、ř は、a, e と共に発音されることも少く、o, u と共には, řuk [=tipp! tick!] を除いて絶対に現われない。

当時のチェハ語表記にあっては、v による・u の代用が支配的であったことをわれわれは知っている。ヤン・フスは、まず『アベツェダ』において、この代用を廃して、u 字母の用法を ř のそれとひとしいものとした。

さらに彼は、『アベツェダ』の中で、v と w とについて次ぎの用法を確定していた。すなわち v は、綴頭、綴中、綴尾のいずれにおいても、u を除く・他の全母音と共に、用いられる（例: velikoft [=magnitudo]）。これにたいして w は、そのあとにいかなる母音も現われない場合の v に換えて使用される。この・用法上の区別は、『チェハ語正字法』でも、踏襲されている。綴頭における w 使用の例は, wik

[=*lupus*], wřch [=culmen], wřft [=stratura], wřak [=autem]。綴中での例は, dáwno [=diu], ohawno [=abominanter], řlawno [=laudabiliter]。綴尾に現われる例は, daw [=pressura], lew [=leo], liw [=fundens], řow [=venacio], pluw [=natans]。

上述のように, u のまえでは v は使用できないが, この場合には v は w によって代られ, vu→wu となる (例:wuole [=voluntas, nč: vřle], wuodci [=ducens, nč: vřdci], wuoz [=vehiculum, nč: vřz])。

[nč は, v と w の 用法上の区別をすべて廃し, 上掲例語に類する場合にはいずれも, v のみを用いている。]

ヤン・フスは, x については, チェハ人の場合, xil および若干の固有名詞, 例えば, Mixík, Alexík をしるす時以外, この字母を必要としないと述べており, かつ x 音が k+f の音に等価であることを理由に, xil を křil に, Mixík を Mikřík に, Alexík を Alekřík に, それぞれ書きあらためることがふさわしいと示唆している。

最後に, z と ž とであるが, z は綴頭, 綴中, 綴尾のいずれにあっても, 全母音のまえに立つ。a のまえ (例:zákou [=lex]), e のまえ (例:zebe [=friget, <zábst]), i のまえ (例:zima [=hiems, frigida]), o のまえ (例:zobe [=rostrum tundit]), u のまえ (例:zub [=dens])。綴尾においても, z は全母音のあとにくるが, 綴中の場合に u のまえに現われることは, wřzúká [=crepat] を除いて稀である。

ž は, 綴頭では o を除いて他の全母音に先行する (例:žák [=candidatus sacerdotii, nč: studiosus], žena [=mulier], žid [=Judaicus]。u にまえに現われる例は少くて, řžuzela [=insectum])。しかし綴中では, ž は o のまえにもおかれるが (例:křžžovaný [=cruci fixus]), 最も多く見られるのは, u に先行する場合である (例:křžžují [=cruci figunt])。綴尾にあつては, ž は全母音のあとに現われる (例:řáž [=lapide sterne], lež [=pone], liž [=linge], polož [=iniunge], řluž [=servi])。そしてこの時には, i のあとに立つ例が最も多いのである。なおヤン・フスは, ここに付言して, 「綴尾では, y のまえにくる ž は見られない。もし現われることがあったとすれば, y は二重母音として発音される。すなわち řy は, řai ないし řoi と発音される」としている。

われわれは, すでに、『アベツェダ』と『チェハ語正字法』とから, 第一に, ヤン・フスの考案にかかる・古チェハ語のアルファベットが, 現代チェハ語のその基本線となっていることを述べた。また第二に, われわれは, とりわけ, 当時乱雑をきわめた軟子音表記方法と比較して, ヤン・フスの表記方法が, いかに単一・明確であるかを

も見た。

ところで、この・チェハ語文化の発展史上に画期的な意義を持つ表記方法にヤン・フスを導いたものは、フライシュハンスのいう‘一音・一文字’の原則、ヤン・フス自身の言葉によれば、「チェハ語で書こうと思う人は、文字の相異をわきまえねばならぬ」とされる原則であった。前第Ⅱ節—1でわれわれは、二重子音 *zz* をもって *ž* 音を表記する方法が行なわれていたことを見たのであるが、ヤン・フスもまたこの方法にたいして、「百回 *z* を書いても、発音はふえないし、*z* 以外の音にはならない。これは *ž* と書くこと」と指定しており、*cz* による・*č* 音の表記、*jj* による・*j* 音の表記、*tt* による・*t* 音の表記についても、同じく、‘チェハ語固有音の固有表記方法’を主張しているのである。

ヤン・フスの・この方法原則は、ひとり軟子音の表記にかかわるのみではない。彼が、「長母音であることを示すためには、それぞれの母音の上に、細い小線をおくことが必要であろう。すなわち、*á, é, í, ó, ú, ý*」として、軟子音表記符号とひとしく現代チェハ語字母にそのまま継承されている‘小線付き・長母音’の表記符号を創造したのも、やはり上にしるした「文字の相異」を表記する原則、一音・一文字の原則から発したものに外ならない。

古典語の場合とひとしく、チェハ語にあっても、長・短母音の組合せから、‘音量詩’が構成される。しかし古典語の場合には、別に長母音符号が工夫されることはなかった。このところから考えるならば、ヤン・フスが、軟子音表記符号と共に、長母音表記符号を考案したことは、本節の最初に『チェハ語正字法』の・第一の立場として指摘したように、彼が‘チェハ語の個性’をあくまで明確に表現したい、とする意図に導かれていたことを、物語っているのである。

さらにまた、すでにふれたように、ヤン・フスにおける・チェハ語整序の努力を貫ぬくものは、チェハ語の‘的確・敏速・平易な読解・表記’を得さしめようという・教授学的な目的意識であった。軟子音および長母音表記符号の考案は、このところからもうまれたのである。そしてヤン・フスは、この目的から、さらに‘略字表記’の案出にまで進む。その例をあげれば、*pfe* は *p^o* に、*pfi* は *pⁱ* に、*pra* は *p^a* ないし *p^ä* に、*pro* は *p^o* に、それぞれ略され、また *kfe* は *k^o* と、*kfi* は *kⁱ* と、*kra* は *k^a* と、*kru* は *k^u* と略記される。同ように、*dfe* は *d^o*、*dfi* は *dⁱ*、*dra* は *d^a* 等々である。

なお、彼は、これと共に、*m* ないし *n* を省略して、その代用符号に‘小帽子’をおく方法（例：*ban*→*bâ*, *nam*→*nâ*, *len*→*lê*, *ven*→*vê*）をもあげ、さらに加えて、他

にも同ような省略方法が可能であることを示唆している。

もちろん、この考案の背後には、中世ラテン語における省略慣行が控えているものと推測されるにせよ、われわれは、このところに、『チェハ語正字法』の・第二の立場、すなわち＜母国語習得の的確・平易・敏速＞を保証する方法を提示しようとする意図のうち、とりわけ‘チェハ語読解の敏速性’を志すヤン・フスの心を見るのである。

注

- 1) 『チェハ語正字法』には、パラツキーの発見にかかる‘トゥシェボニュ稿本’のほかに、抜粋にとどまる・不完全‘トゥシェボニュ稿本’が一種ある (Bartoš: op. cit. str. 73.)。ここでは、‘トゥシェボニュ稿本’に基づく・シムベラのチェハ語訳を収録したフライシュハンス本に従った (Flajšhans: Mistra Jana Husi sebrané spisy. Svazek V. str. 105—113.)。
- 2) Novotný V.: op. cit. str. 183.
- 3) 前第Ⅱ節—1 で見たように、若干の軟子音の上に・, ʹ, ˘, 等の符号をつけることが、すでに試みられていた (前節のⅡ.—2—b), c), d); Ⅱ.—9—b), c); Ⅱ.—10—b), c), d); Ⅱ.—12—b); Ⅱ.—17—b) をそれぞれ参照)。
- 4) Kühner, Raphael: Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache. 2te Auflage. Bd. 1. Hannover, 1912. S. 33.
- 5) Šimek, František 編の『古チェハ語小辞典』(‘Slovniček staré češtiny, Praha, 1947.)によれば、l’+u で始まる 20 箇の古チェハ語が存在した。
- 6) フライシュハンスは、その編集する ‘Magistri Io. Hus Sermones in Bethlehem. 1410—1411’. への Glossar の中で、i と ʹ とを同一のものとして扱っている。(‘Indices’, Praha, 1947, p. 82.)。